

第5章 カフカの「奇妙な」対話*

—「お見通し」発言の機能—

0. はじめに

カフカ作品を他のテキストから際立たせている特徴の一つに登場人物間の対話がある。作品内で交わされる対話は、日常的なそれとはかなり異なり、特殊で奇妙なやり取りといった印象を与える。その「奇妙さ」の構成にはさまざまな要素が関与している。本章は、そのうちの一部「お見通し」発言に焦点をあてる。

一般に、ある人物の内面世界は、当該の人物以外は直接には知りえない。知りえたとしても、それを当人以外の人物が断定的に表現することは通常できない。もし他人の内面世界に言及する場合は、外見からの判断を表わす表現を付け加えるか、疑問文という形式をとる必要がある。ところが、カフカの対話テキストには、そのようなルールにしたがわないものがある。たとえば、ある対話では、一人の話者が、別の話者の思考・期待・意思などを、あたかもその話者の心を見通しているかのように二人称形式で断定的に述べる。その結果、その特殊な発話のために対話者間の相互行為が予期せぬ方向へと展開してしまう。そのような変則的な発話を「お見通し」発言と名づけよう。本章では、この「お見通し」発言をカフカ作品に特徴的な対話展開の技法の一つと捉え、その技法の特徴をある対話断片テキストの分析によって明らかにする。

1. 対話の構造と「お見通し」発言

1.1. カフカ作品の対話

すでに述べたように、カフカ作品を他のテキストから際立たせている特徴の一つに登場人物間の対話を挙げることができる (vgl. Krusche 1974)。作品内で交わされる対話は、日常的なそれとはかなり異なり、特殊で奇妙なやり取りであることが多い。この点に着目し、さまざまな形で対話分析がこれ

まで行なわれてきている。たとえば、カフカ作品の特徴を対話における対話
参与者間の誤解とそれによって引き起こされるコミュニケーションの齟齬に
求める研究の方向がある (vgl. Hess-Lüttich 1979)。あるいはまた、カフカ
作品の解釈の多様性と対話の機能との関係に焦点をあてる研究などがある
(vgl. 三谷 1986)。カフカ作品の対話は、このような誤解や解釈の多様性と
いった複数の意味世界の構築にかかわる側面だけでは必ずしも十分に説明で
きない場合もある。たとえば、意味世界の構築を積極的に拒否しているよう
に見える対話がある。このようなテキストでは、対話という日常的な相互行
為形式をとりながら、それによって提示されるはずの意味世界の構築が拒否
されるという非日常的なコミュニケーションが描かれる。対話のこの奇妙な
展開原理は、カフカ作品の特徴の一つになっていると筆者は考える。

その「奇妙さ」について、筆者はこれまでいくつかのテキストで分析を試
みた (西嶋 1990, 2000, 2001a, 2001b)。その結果、テキスト内言語相互
行為レベルでは、結束性 (Kohärenz) のきわめて高い言語行為連鎖が認め
られるが、意味論レベルでは、整合的でない事態の叙述によって統一的な意
味世界が提示されないので、結束性はきわめて低いことが明らかにされた。
すなわち、テキストを構成する2つのレベルに焦点をあてると、相互行為の
形式面に関してはやり取りが正常に成立しているが、意味世界に関してはそ
の構築を妨げるという構造が見られるのだ。両レベル間に見られる結束性の
度合いのアンバランスが「歪み」となり、上記の「奇妙さ」を作り出してい
ることがわかった。

このような「歪み」の他には、いくつかの技法が認められる。対話の展開
に関わるものにしばって紹介しよう。たとえば、否定行為あるいは質問行為
の繰り返しとなされる場合があるが、結果として知らぬ間にテーマや次元の
ズラシなどが引き起こされている。同一言語行為の繰り返しによって通常認
められる形式に慣らしておき、結果としてその形式の過剰な展開によって整
合性のある意味世界の構築を妨げてしまうという技法である。たとえば、
Kinder auf der Landstraße (『国道の子供たち』、本書第3章参照) では質
問行為の繰り返しの中で、„Leute“ から „Narren“ へと表層上のテーマが変
化している。これによって、意味論的焦点が拡散し、意味論レベルでの整合

性が失われる（西嶋 2001b）。同様に、同一行為の繰り返しという手続きによって、次元間で移動が生じる場合もある。たとえば、*Die Bäume*（『木々』、本書第1章参照）では否定行為の繰り返しによって「主観」世界から「客観」世界へ（西嶋 1990）、また、質問行為の繰り返しによって *Von den Gleichnissen*（『寓意について』、本書第2章参照）では言明内容とメタ表現の間で、*Der Brunnen*（『泉』、本書第4章参照）では発話のレベルから語りのレベルへとそれぞれ移動が起きている（西嶋 2000, 2001a）。その他の技法として、予想外の発話による対話展開が挙げられる。*Der Brunnen* では、登場人物がまったく予期していない「声」による介入行為がなされ、それによって対話が始まってしまう（西嶋 2001a）。その「声」は今度は語りの次元にまで進出するという特異な展開技法が認められた。こういった「歪み」やさまざまな技法によって、カフカ作品の対話の特殊性の一部を適切に説明することができるだろう。

ところで、これまで対話に限定してカフカの特徴を述べてきたが、一般に言われる「カフカ的なもの（Das Kafkaeske）」とはいったいどのようなものだろうか。「カフカ的なもの」として提出されてきた特徴の中で頻繁に取り上げられるのは、ノイマンがカフカのアフォリズムに頻出する語彙に基づいて提出した「反転（Umkehrung）」と「そらし（Ablenkung）」という概念であろう（vgl. Neumann 1968）。この2つの概念は、言語表現によって描写される意味世界とかわかり、意味世界の構築に関わる操作を説明しようとするものだ。では、この説明概念は、カフカのテキストにおける対話の構造にも適用可能であろうか。

たしかに、この概念を用いれば、カフカ作品の対話に見られる特徴的な構造の一部は説明可能だ。たとえば、筆者が分析して明らかにしたカフカのテキストの対話構造を例に考えてみよう。「反転」で説明できるのは、*Die Bäume* で提示される „Baumstämme im Schnee“ の2つの対立する様態である。*Kinder auf der Landstraße* や *Der Brunnen* で中心となるテーマや次元のずらしは、「そらし」にあたる。テキストに見られる同一言語行為の繰り返しは、そのような「反転」と「そらし」のための一つの手続きと位置付けることができる。しかし、両概念では説明しきれないものもある。それ

は、意味論レベルと言語相互行為レベル間の結束性の度合いのアンバランスである。その意味でこれが、カフカ作品の対話に共通する特有の特徴とと言えるかもしれない。

ところで、カフカ作品の対話の中には、ある登場人物の意志や期待などの思考内容を語り手以外の他の登場人物が描写し、それが対話を展開させる原動力になると考えられるものがある。語りにおいては一般に、ある登場人物の内面世界は、一人称か三人称によって描写される。すなわち、前者では一人称で表わされる人物が自らの思考内容を語り、後者では語り手が登場人物の思考内容を代弁するわけである (vgl. Stanzel 1985)。しかし、カフカの書いた対話の中には、このルールに違反し、二人称の相手の思考内容を断定的に発言するものがある。これを、本章では特に、「お見通し」発言 (durchschauende Äußerung) と呼ぶことにしよう。

1.2. カフカの作品 *Das Urteil* について

つぎの発話は、カフカの小説 *Das Urteil* (『判決』) からとったものである。

- (1) „Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst.“ (*Das Urteil*, S. 58. 下線は筆者。以下同様)
- (2) 「おまえは、自分にはここへ来る力がまだある、自制しているのは自分がそう望んでいるからだ、と思っている。」(円子修平訳, S. 43)

どことなくおかしいと感じられる発話である。この発話は、言語学的に言えば、統語論的・意味論的な制約に違反している。それは、二人称代名詞と思考を表わす動詞および関連表現 (以下、思考動詞あるいは思考表現と呼ぶ) が組み合わせられ、断定的に対話相手の内面世界である思考内容が表現されていることによる (下線部参照)。通常、認識論的に他者の内面は見通せないもので、そのような行為は現実問題として不可能だからだ。しかし、上記の発話を問いかけ表現にすれば文法的な制約を回避することができる。事実、別の翻訳では問いかけの形で訳し、「奇妙さ」がわからないようにしてあるも

のもある：

- (3)「近づく力はあるんだが、わざと近づかないだけだと思っているな。そうだろう。」(池内紀訳, S.50)

問いかけにより、相手の考えを断定するのではなく、確認しようとすることになるからである。しかし、冒頭で引用した発話は、疑問文ではなく、相手の思考内容を断定的に表現していることは明らかだ。認識論的な常識を超えているという点で、奇妙な発話である。本稿が扱う対象は、このような奇妙な発話である。ここでは、このような発言を、相手の思考内容を見通し、それを提示していることから、「お見通し」発言と呼ぶことにする。

すでに述べたように、上記の引用は、カフカの *Das Urteil* (『判決』) からとった発話である。適切な文脈に置かれると、統語論的・意味論的制限に対する違反は、有意味なものとなるようだ。この小説は、いわゆる三人称小説である。語り手が、登場人物の行動や言動を説明するという形式をとっている。主な登場人物は、ゲオルクと父親である。簡単にその内容を紹介しておく。

ゲオルクは自分の部屋でロシアに住む友人に手紙を書き、ある女性と婚約したことを告げる。その手紙をもって父親の部屋に行く。そこで友人の話をし始めると、それまで弱弱しかった父親が急に元気になり、ゲオルクの言動を批判し、あげくに死刑の判決をくだす。それをうけて、ゲオルクは外に出、川に飛び込むという内容だ。この話は、大きく分けると3つの場面からなる。(1)ゲオルクの部屋、(2)父親の部屋、(3)外。興味深いのは、部屋の移動により、描写のパースペクティブが変わる点だ。(1)の場面では、ゲオルクが三人称で登場し、その視点から友人や父親などのことが語られる。(2)では、ゲオルクと父親の対話を中心となる。父親の発話は、(1)で描かれた事実関係を相対化し、それとは異なる観点から事態が描かれる。父親という新たなパースペクティブが導入されたからだ。二つの異なるパースペクティブどうしの対立が起きたのである。しかも、パースペクティブの違いは、ゲオルクと父親の立場あるいは役割の違いを反映し、両者が対等な関係にないことを

表わしているようだ。

1.3. 次元の異なる二人

父親とゲオルクは、登場人物として同格の地位にいないわけではない。そのことは、冒頭で引用した発話が明らかにしている。その前後のコンテキストをつけて引用する：

- (4) „Jetzt wird er sich vorbeugen“, dachte Georg, „wenn er fiel und zerschmetterte!“ Dieses Wort durchzischte seinen Kopf.

Der Vater beugte sich vor, fiel aber nicht. Da Georg sich nicht näherte, wie er erwartet hatte, erhob er sich wieder.

„Bleib“, wo du bist, ich brauche dich nicht! Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst. Daß du dich nicht irrst! Ich bin noch immer der viel Stärkere.(...)“ (*Das Urteil*, S. 58)

- (5) こんどは身体を屈めてみせるぞ、とゲオルクは思った、転がり落ちてこなごなに碎けてしまえ！この言葉が彼の頭のなかをシュッと音をたててつきぬけて行った。

父は身体を屈めた、が、転がり落ちはしなかった。ゲオルクが期待に反して近づかなかったので、彼はまたまっすぐに立った。

「そこにじっとしているがいい、わしはおまえなど要らない！おまえは、自分にはここへ来る力がまだある、自制しているのは自分がそう望んでいるからだ、と思っている。思い違いはしないがいい。いまだってわしのほうがはるかに強いのだ。…」(丸子修平訳, S.43)

すでに述べたように、この小説はいわゆる三人称小説である。語り手が登場人物の行動を語るという形式をとっている。一般に、語りは一人称か三人称形式でなされるのが普通である。前者では、登場人物の一人が語り手を兼

ね、語り手が自らの思考や感情を通して物語るという形式をとる。ところが、後者では、登場人物以外のいわゆる局外の語り手（*auktorialer Erzähler*）が想定され、その語り手が登場人物の行動を語るという形式をとるわけである。その際、この語り手には特別な地位が与えられる。登場人物の思考や感情を見通すことができ、それを表現するという役割をもつからである。すべてを見通すことができる全知全能の「神」のような特別な地位を与えられているわけだ。他者の思考内容などを見通せ、その内面について断定的に表現できるのは、特別な存在、超越的な存在しか考えられないからである。

この点を上記の例で確認しておこう。引用1行目の表現のあとに „dachte Georg“ という説明句が挿入されている（下線部参照）。これは、ゲオルクという登場人物の考えた内容だということを説明する。こう説明するのが語り手で、登場人物のゲオルクやその父親とは異なる次元にいる。この語り手によって、登場人物の考えや感情などが説明されるわけである。その意味で、この語り手は登場人物の内面世界を見通せる特別な機能をもっていることがわかる。

ところが、上記の例では、登場人物の一人である父親が、局外の語り手のような発言をしている点が注目される。父親は対話相手の息子の内面世界を断定的に表現している。明らかに息子の思考内容を見通しているわけだ。しかし、すでに述べたように、同じ次元にいるはずの登場人物の一人が別の登場人物の内面世界に立ち入ることは通常許されない。まさに日常的なルールが破られているのだ。この発言は、父親とゲオルクは同格に扱われていないことを反映していると考えるのが自然な解釈だろう。そう考えれば、「奇妙さ」は解消される。

1.4. 「お見通し」発言の機能の仮説

現象だけをとらえると、たしかに上記の発話は日常的に考えれば、統語論および意味論上の制限に違反している。しかし、私が調べた範囲内で、この発話の認識論上の問題点について論じている研究はない。おそらく、解釈が優先されているために、それが気づかれにくいのだろう。

このような思考動詞の人称制限に関する文法違反を解消あるいは説明する

ために、一般的に言えば、少なくとも2つの方法がありうる。一つは、作品内の人間関係が言語表現に反映したという説明である。すなわち、上記の例が含まれる作品『判決』では、ゲオルクとその父親の立場は同格ではなく、父はゲオルクに対して支配者と規定されうるため、それが対話として現出したという考えである。この考えに基づけば、父親がゲオルクの考えを見通し、それを批判することも十分可能である。また、父親の「お見通し」発言に対して反論しようとしないう点にも注目すべきだろう。「お見通し」行為を当然のこととみなし、それが表わす関係を受け入れているからだ。

他の一つは、非日常世界の構築のための言語操作によるものである。すなわち、このような思考動詞による二人称表現の内面世界の断定的提示は、ある特殊な世界を作り出すための試みとして考案されたテクニクであるというものだ。通常の世界は、通常の言語使用によって描かれると考えるなら、非日常的な世界は、通常とは異なる言語使用によって描かれるはずである。あえて、日常次元の文法ルールを無視すれば、通常とは異なる世界への入口に到達する可能性があるわけである。カフカ作品一般についていえば、この両者が関与しているように思われる。本研究では、後者の考え方を検証するために、ある対話断片の分析を試みる。

2. 作品分析

2.1. ある断片テキストの分析

上記の「お見通し」発言と同様の構造をもつカフカのテキストとして、たとえば、つぎの断片テキストを挙げることができる。このテキストは断片として集められているものの一つで、個別のタイトルはつけられていない。そこで、テキストで言及されている „Flöte“ に注目し、本稿ではこの断片テキストを *Die Flöte* (『笛』) と呼ぶことにする。この断片は、対話である。各発話の主語としては、人称代名詞 „Du“ と „ich“ しか出現していないことから、さしあたり二者間の対話であると規定しておく。¹⁾ 発話以外、コンテキスト情報がまったく提示されていないので、登場人物どうしの関係は不明であり、発話場面も特定できない。なお、説明をわかりやすくするために各発話に番号を付し、交互に話す人物二人を順に A と B とする。そのテキスト

を引用する。以下では、形式と意味の両面からこの断片を分析し、その特異な構造を明らかにする。

(6)① A : „Auf diesem Stück gekrümmten Wurzelholzes willst Du jetzt Flöte spielen ? “

② B : „Ich hätte nicht daran gedacht, nur weil Du es erwartest, will ich es tun.“

③ A : „Ich erwarte es ? “

④ B : „Ja, denn im Anblick meiner Hände sagst Du Dir, daß kein Holz widerstehen kann, nach meinem Willen zu tönen.“

⑤ A : „Du hast Recht.“

(*Konvolut* 1920, S.358)

(7) 「きみは、この曲りくねった根っこを使って、みごとに笛を吹いてみせるというのかね?」

「ほく自身はそんなことを思ってもみなかったのだが、きみが期待しているから、ただそのために吹いてみるつもりだ」

「ほくが期待してるって?」

「そうだ、きみはほくの手を見て、どんな木片でも抗しきれず、ほくの意のままに鳴らざるをえないだろう、と内心思っているのではないか」

「きみの言うとおりで」

(飛鷹節訳, S.261-262)

①文は、平叙文の形式をとっているが、文末の疑問符から、問いかけの機能をもつと理解できる。「Auf diesem Stück」という句に含まれる指示代名詞 „diesem“ が空間的の近接関係を表わすので、この発話の主語 „Du“ は、明らかに眼前の相手を指示している。したがってこの発話は、近くにある特定の対象物に関して眼前にいる相手（ „Du“ ）に対して „Flöte spielen“ の意

志の有無を確認しようとしていると考えられる。

②文は、二つの主文からなる。前半部の主文に含まれる „daran“ は、①文の命題〔B による „Flöte spielen“ 〕を受けている。それが②文の前半部で否定されていることから、①文で問われた „Flöte spielen“ する B の意志は②の発言者 B には本来なかったことが明らかにされる。ところが、後半の文では、発話者の B が „Flöte spielen“ することを①の話者 A が期待しているという理由を挙げ、その理由に基づいてそれを実行しようという意図を述べる。ここで問題となることがある。根拠づけの副文の内容は、発話者 B が „Flöte spielen“ することを対話相手の A が期待しているというものである。相手の期待を当該人物以外の者が描写しているので、ここでは明確な形で「お見通し」発言がなされているわけだ。

③は平叙文であるが、²⁾ ①と同様に、末尾の疑問符から問いかけという機能をもつことがわかる。発話文に含まれる代名詞 „es“ は、②における B による „Flöte spielen“ を表わし、理由として述べている A の期待を疑問に付している。②において B が根拠として提示しているのは、話者 A の思考内容である。A は②でいわば勝手に自己の考えを提示されたので、換言すれば、「お見通し」されたことに対して、それを疑問に付しているのである。

④は、③の問いかけを肯定し、その根拠として、相手 A が考えているとされる期待の内容をさらに具体的に説明している。これは、②文と同じ問題をはらむ。当該人物 A 以外の人物 B が A の内面世界である意思を叙述しているわけで、相手の考えは「お見通し」であることを述べていることになる。

最後に⑤では、④で提示された根拠により、③で疑問に付した内容〔B による „Flöte spielen“ 〕を A が認める。そこで、この対話断片は終わる。

2.2. 思考表現語彙と行為主体

このテキストには、理由を導く接続詞 „weil“ や „denn“, 相手の質問に対する肯定の答えを表わす „Ja“ や „Du hast recht.“ が含まれている。これらの表現は、一般に議論などの説得を目的とする談話で使用される。その意味でこの対話は、論弁性 (Argumentativität) が高く、相手を説得するタイプに属する相互行為であることがわかる (vgl. Marui 1995)。すなわち、対

話者間の言語相互行為という観点からすると、この対話は、使用される表現形式や行為連鎖に関して結束性がきわめて高いということである。その点ではたしかに、形式的に相互行為が成立している。ところが、意味論レベルでは、奇妙な事態が提示されている。すなわち、不可知のはずの相手の内面世界が断定的に表現されるのだ。

この展開を支えているのは、„willst“, „will“, „Willen“, „daran gedacht“, „erwartest“, „erwarte“, „sagst Du Dir“ といった意味論的に関連する語彙である。これらはすべて、意志、思考、期待といったような思考内容を表現する語彙である。本章では、これら一般を思考表現と呼び、そのうち動詞については、思考動詞と呼ぶ。上記の対話では、これらの多くが主語として二人称代名詞 „Du“ と結びつけられている点に注意しなければならない（下表を参照）。

・主語による分布

Du	ich
① (...) willst Du (...) Flöte spielen?	② Ich hätte (...) daran gedacht
② (...) weil Du es erwartest	② (...) will ich es tun
	③ Ich erwarte es?
④ (...) sagst Du Dir, (...)	④ (...) nach meinen Willen zu tönen

一般に、思考動詞の使用には統語論・意味論上の制限が加わる。文学テキストの語り手による叙述は別として、これらの動詞は、その主語として一人称と結びつくのが普通である。二人称の思考内容については、その人物がそれを明らかにしない限り、それ以外の人物はその内容を知る手段を持たないからである。益岡(1997)によれば、感情形容詞や思考動詞などは人物の私的領域にかかわるので、それを断定的に述べる場合は人称の制限が課されるという。②の後半文と④文ではそれぞれ „erwartest“, „sagst Du Dir“ という思考表現が使われている。これらは理由を導く節に埋め込まれているので、その内容は自明のこととして提示されているが、その主語は二人称なので、上の人称制限に違反している。すなわち、内面世界にかかわる思考内容を断

定的に提示できるのは、その思考を行なっている当該人物でなければならないので、上記の2つ発話文は人称制限を犯した奇妙な表現ということになる。もちろん、このような思考動詞でも二人称が主語に立つことがある。それは疑問文という形をとることによって相手の思考内容を尋ねたり、確認したりするという場合である。上例の対話では、①がそれにあたる。

文学技法として語り手が登場人物の内面に介入し、それを叙述することはある。しかし、登場人物という点で同じレベルに属するはずの者が、対話相手の私的領域の内面世界に介入し、それを叙述するというのは日常的な対話としてはありえない。そこには非日常的な何かが起こっていると考えていいだろう。

2.3. 展開の技法

この対話の展開をまとめてみよう。①でAは、„Du“で指示される相手Bに対して、„Flöte spielen“する意思の有無を問う。①の前には先行する発話がないので、この発話は唐突に響く。その唐突さは、つぎの②の応答からもわかる。②でBはまず、その指摘された意思の内容がもともと自分になく、意外であることを明らかにする（前半部：②a）。ところが、つぎに[Bによる„Flöte spielen“]をAが期待しているということを根拠として提示し（後半部：②b）、それに基づいてBは自分の意思として„Flöte spielen“することを表明する。この部分も一方的である。何の脈絡もなく相手の私的領域にかかわる期待に言及するからである。その唐突さは、③のほぼ鸚鵡返しへの反応でも知ることができる。③でAは、[Bによる„Flöte spielen“]をAが期待しているというBの指摘をAは疑問に付す。④でBは、その疑問に対して、その根拠を具体的に提示する。それは、どんな木片もBの意欲どおりに音を出せるとAが考えていると断定する内容である。これも相手の私的領域に属する思考内容を述べている。ところが、⑤でAは、Bの根拠提示を承認し、そこで対話は終わる。

対話の連鎖としてまとめると、つぎのようになろう：

A：「相手 B の笛を吹くという意図の確認」(①)



B：「意図の否定」(②a) + 「相手 A の期待を根拠として新たに B 本人による意図表明」(②b)



A：「期待に対する疑問提示」(③)



B：「具体的根拠提示」(④)



A：「納得表明」(⑤)

以上のような展開をこの対話はしている。すなわち、この対話の特徴は、相手の思考内容を先取りして提示し、それによって相手の反応を引き出すというパタンの繰り返しにあると考えることができる。

このテキストのやりとりで明らかになることは、表層上のテーマが出発点となる[Bによる「Flöte spielen」]の意図の有無からAの[Bによる「Flöte spielen」]の期待の有無へと移行している点である。テーマが変化した結果、[Bによる「Flöte spielen」]が中心から離れてしまう。相手の考えは「お見通し」であることを明示することによって、「お見通し」発言の役割に注目させる働きをもつ。結局のところ、この対話では、BはAが期待しているから、笛をふいてやろうという帰結を示唆する。³⁾

3. 結語：「お見通し」発言の意味

本章で扱ったような対話には「お見通し」発言が含まれている。これは、相手の思考内容を断定的に叙述するものであり、日常的な言語使用ルールを破っている。この違反をどう捉えるか。このような発話は、予言は別として、日常的な対話では出現しない。したがって、これは非日常的な対話という解釈をとることになる。その後の展開には、少なくとも2つの可能性がある。「お見通し」発言を受け入れる場合と、それを疑問に付したり、否定する場合である。前者の場合は、「お見通し」発言を当然のこととして受け入れる

ことになる。それが可能なのは、そのような関係がすでに前提されているからだ。これは、『判決』の例があてはまる。日常的な親子間の対話ではなく、個人の内面が分裂し、それが人格化した対話という想定になる。⁴⁾ これはすなわち、異なる個人間の関係だけでなく、同一個人内の分裂した2つの自己の対話と捉えることも十分可能だということである。一個人の中に複数の自己がありうるという世界を構築するためにも利用できるだろう。

他方、後者では、そのような関係が前提とされず、自己の思考内容を語られた当該の人物は、その唐突さに驚くことになる。それによって、日常世界では考えられない方向で対話が展開する。そのような展開は、相手との関係自体を見直させる働きをもつ。当たり前とされた異なる個人間の関係を疑問視し、相対化させる可能性をはらんでいるからだ。

以上をまとめてみよう：

説明の可能性：(a)「お見通し」発言を受け入れる場合

「お見通し」発言が可能な関係が前提されている

(b)「お見通し」発言を受け入れない場合（疑問、否定）

問題状況の前景化：関係の新たな規定

非日常世界の創出

この対話は、ある種の世界を創造した結果として、それを反映する言語の用法が生まれたのか、それとも何らかの非日常的な世界を構築するために、通常とは異なる言語使用を試みたものなのか、そのどちらが妥当するかについて、にはわかなには判断できない。一つの仮説として、思考表現を多く用い、それに非日常的な言語操作を試みることで、日常的でない新たな世界への入り口をつくろうとしたと考えてみることも可能だろう。これまでいくつかのカフカ作品の対話を分析してきた結果、ある種の技法が取り出せたわけである。とするなら、「カフカ的な」世界の構築に、言語使用上の技法がかかわっていると仮定することも許されるだろう。断片（Fragmente）には、そ

のための文体練習と思われる表現が散見される。

本章で取り挙げた断片テキストの「お見通し」発言は、基本的に対話を予期せぬ方向へと展開させる原理であり、カフカの作品創造のための技法と捉えられる。今後の課題は、このような「お見通し」発言やそれに関わる場面の例を収集し、ここで提示した技法との関連を分析し、意味づけすることである。なお、本書第4章で扱ったテキストに見られる次元間の移動も、この「お見通し」発言との関連づけて説明することも可能であろう。両者を統合的に検討することで、通常は対立あるいは隔絶されていると見なされている関係を疑問にふす、つまりそれを前景化するという技法がより一般性的な形で取り出すことが期待できる。

注

*本章の一部は、ドイツ学術交流会（DAAD）招聘客員教員としてレーゲンスブルク大学滞在中に行なった演習（Hauptseminar: *Linguistische Stilistik*, Wintersemester 2001/02）での議論に基づいている。積極的な議論により刺激を与えてくれた受講生に感謝する。

- 1) もちろん、同一個人による「対話」という理解も可能であるが、本章では二者間の対話に限定して考察する。
- 2) この発言は、*Apparatband* によれば、草稿の段階でつぎの表現が削除された後、書かれたらしい： „Nur weil Du davon überzeugt bist, dass es gelingen muss, will ich es tun, sonst“。この表現における „davon überzeugt bist“ も思考表現であることには変わらない。
- 3) ここから、一つの可能な解釈の契機が生じる。モチーフは笛の演奏だが、これを書くことのメタファーと捉えることができよう。すると、意思のとおり音楽を奏でると同様に、意思のとおり書くことができるという内容を表わしていると解釈できる。カフカの書くことに対する考えを垣間見ることができよう。すると、対話者間の関係は何か。読書と作家だろうか。とすれば、①, ③, ⑤は読者、②と④は作家と位置づけることが可能だ。作家は、読者の期待によって書くということになる。
- 4) エディプスコンプレックスなど精神分析学に基づく解釈については、Sokel (1976) を参照。

使用テキスト

—*Das Urteil*. In: Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. Kritische Ausgabe. Hrsg. von W. Kittler, H.-G. Koch und G. Neumann, Frankfurt/M.: Fischer Taschen-

- buch Verlag, 2002, 41-61.
- Konvolut 1920*. In: Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Kritische Ausgabe. Hrsg. von J. Schillemeit. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, 223-362
- Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II. Apparatband*. Hrsg. von J. Schillemeit, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

翻訳

- 『判決』(丸子修平訳):『決定版カフカ全集1』(マックス・ブロート編),新潮社,1980.
- 『判決』(池内紀訳):『カフカ小説全集④ 変身ほか』,白水社,2001.
- 断片(飛鷹節訳):『決定版カフカ全集3』(マックス・ブロート編),新潮社,1981.

文献

- Marui, I.: »Argumentieren, Gesprächsorganisation und Interaktionsprinzipien —Japanisch und Deutsch im Kontrast—«. In: *Deutsche Sprache* Heft 4, 1995, S.352-373.
- 益岡隆志:「表現の主観性」. In: 田窪行則編:『視点と言語行動』. くろしお出版, 1997, S.1-11.
- 西嶋義憲:「カフカのテキスト *Die Bäume* を理解するために —テキストの多層性について—」. In: 『かいろす』(「かいろす」の会) 第28号, 1990, S.31-44 (Dt. Fassung: »Zum Verstehen von Franz Kafkas Stück *Die Bäume* —Ein text-linguistischer Ansatz zur Vielschichtigkeit des Stücks—«. In: 『金沢大学文学部論集』第20号, 2000, S.175-195). [本書第1章]
- ———:「カフカ作品における対話の「歪み」 —*Von den Gleichnissen* のテキスト言語学的分析—」. In: 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第33号, 2000, S.1-10. [本書第2章]
- ———:「カフカ作品における次元の転換 —カフカのある『断片』のテキスト言語学的分析—」. In: 『金沢大学文学部論集』第21号, 2001a, S.81-93. [本書第4章]
- ———:「カフカのテキスト *Kinder auf der Landstraße* における対話の分析 —繰り返しの技法—」. In: 金沢大学言語教育研究センター『言語文化論叢』第5号, 2001b, S.161-174. [本書第3章]
- Stanzel, F.: *Theorie des Erzählens*. 3., durchges. Aufl., Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1985.